

令和4年度第2回秩父市総合教育会議 議事録

期 日	令和4年12月26日（月曜日）
時間・場所	15時～16時25分・秩父市役所本庁舎3階 庁議室
出席者	<p>北堀市長、前野教育長、松本教育委員、山中教育委員、大島教育委員、浅海教育委員</p> <p>市長室長、市長室専門員兼総合政策課長、市長室専門調査員、総合政策課主査</p> <p>教育委員会事務局長、教育委員会事務局次長2人、教育委員会専門員兼教育総務課長、教育研究所長</p> <p>傍聴者なし</p>
会議内容	<p>○市長挨拶</p> <ul style="list-style-type: none"> ・現在、冬季に入り、新型コロナウイルス感染症の陽性者が市内でも非常に増えている。教育委員会からは、児童生徒の感染が非常に多くなっているとの報告も受けている。特に小学校での感染が多い。 ・ワクチン接種率については、4回目の接種を終えた方は、約4割に達している。約1割の方は、5回目の接種も終えている。 ・皆様にも手指消毒や窓開けなどの定期的な換気など、ご自身で感染予防対策の徹底し、体調にはぐれぐれも留意いただきたい。 ・今回のテーマは、「ICT教育の学習について」と「小学校低学年からの英語教育について」を議題として委員の皆様のご意見を伺いたい。 <p>○教育長挨拶</p> <ul style="list-style-type: none"> ・先ほど教育委員会の定例会も終了した。その際にも報告したが、二学期では、小中学校2校が学校閉鎖した。 ・ただ、長い二学期の中で、学校行事や保護者参観ができたことを保護者から喜んでもらったので、市長にも報告させていただく。 ・今回も2つの大きなテーマがあるが、教育委員さんには、過去に学校訪問していただいたが、その観点からも議論していただきたい。 <p>○議事</p> <p>(1) ICT教育の学習について</p> <p><u>資料1について教育委員会事務局飛川所長より説明</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・吉田中学校2年生の英語のICT授業をビデオにて視聴 (市長) ・このICT授業を通じて、子ども達がどこまで理解して話せているのかかを感じる。 ・先日、幼稚園に対して秩父高校の2名の生徒からボランティアによる英語のヒアリングを指導してもらった。英語教育は低学年から始めていくのが良いのではないかと感じる。 (教育長) ・PCは1人1台配布されており、その活用を求められる状況であり、教育委員会でも使い方を研究している。使ってみて、使えるところで使ってみる。ダメであれば、使わないという方向性で良いのではない

か。

- ・最終的には子ども達にとって、どこまで理解が進むのか。理解できない使い方であれば意味がない。
- ・先生方の中でも、この分野において、得意、不得意の先生がいる。お互いに勉強しながら、教員の質を出来るだけ一定化していく中で、一人ひとりのレベルアップを図っていく。
- ・教育委員会で取りまとめして、他校にも共有する仕組みを検討している。
- ・ICT教育については、良い面を積極的に活用し、不必要なところは、無駄な使い方はしないように整理していく。

(松本委員)

- ・去年からGIGAスクール構想で話題になっていると思うが、各学校にクラウドブックが導入された段階である。多大なる費用を使っていると思うので、ぜひ使っていただきたい。
- ・学ぶために一番必要な手段を使えば良いと思う。それは紙の教科書であったり、ICTであってでも良いと感じる。
- ・教職員にも個人差、得意不得意があるので、様々なものを共有して行く必要はある。
- ・情報通信技術支援員については、2名で、全小中学校を賄うのは難しいため、普及させるためにはもっと人数が必要である。
- ・教育委員会の中では、様々な学校での取り組みを集約する窓口を設置してはどうだろうか。
- ・ぜひ教職員の格差がないように考えていってほしい。学校内でお互いに共有し合う仕組みが出来上がっていければ良い。
- ・デジタル教科書も登場しているが、それがすべてではないと思う。それはあくまでも手段の一つにすぎない。

(山中委員)

- ・今年の秋頃、吉田中学校と西小学校でICT授業の見学をさせていただいた。改めて感じたことは、GIGAスクール構想が開始され、2年経過したと思うが、子ども達が使いこなしていることに驚いた。先生方もよく研究されていた。コロナ禍でこれだけの授業が出来るようになってきたのは、先生方の努力の賜物だと感じた。
- ・パソコンの操作が苦手な子もいると思うが、さっと手が挙がる子どもが多かった。しかし、担任の先生ひとりで対応していくことは難しいと感じる。そのためには支援員が必要だと思う。
- ・ICT支援員の募集をかけても、人が集まらないという現状を聞いて、なかなか難しいのだと感じた。募集をかけても集まらないのであれば、募集基準を下げることや専門的な支援員を呼んだりすることも必要もあるのではないかと。
- ・小学校では、タイピングは難しいのではないかと想定していたが、先生方が、年齢が低い子ども達用に操作の仕方を工夫していた様子が見られた。
- ・パソコンを使うことによって、読み書きの学びを繰り返していけることなど人として大事なことが失われてしまわないかと危惧していた

が、授業の様子を拝見する限り、グループで討論したりする工夫がされ、自分で考えることがしっかりされていた。

- ・小中学校で1人1台パソコンが配布され、今後も授業が進めば進化していくと思うが、高校に行ってから、小中学校で培ってきたものがどれだけ活かせるか一抹の不安がある。その後の進路の先にも活用がされていくことを期待したい。
- ・保護者もコロナ禍で学校に行く機会がなかったので、ぜひ保護者の方にも観ていただき、宿題をパソコンで提出することもできるようになれば、親の理解が進む一助になるのではないかと思う。

(大島委員)

- ・聞くとところによると、吉田中学校は、代々英語能力が高い学校で、英語教育に力を入れている。英語の授業に対してのタブレットの使い方はトップクラスではないか。
- ・ただ、小規模校では、雰囲気は異なってくるのではないか。様々な小規模校が集まって授業する新しい形を構築することもできると思う。
- ・コロナ禍での導入が、家庭にしながら学校と繋がる良いタイミングであったと思う。
- ・電子ツールに長けた先生は良いが、そうではない先生が苦勞するのではないか。この先に先生方が楽になるためには、本当に有効的に活用できるためには、まだ先になるのであるのではないか。そのためには、ICT支援員が必要となる。募集する際には、目的、目標を明確にしていけば、意識が高い人が集まると思う。

(浅海委員)

- ・ICT教育を1年間やってきた中で課題があると思うので、整理して、知恵を出し合って、解決を目指していく。
- ・もはやICT教育は後戻りはできない状況。
- ・また、5年後のクロームブックの更新時期に、機種の設定や金額の精査が必要となってくる。

(市長)

- ・ICT教育は、あくまでも一つのツールとして使っていく。これを使うと文字や計算ができるようになっていけるが、もしこれが無くなった場合でもできる能力が必要。
- ・低学年のような抵抗なくできるような年齢から入っていけば、スムーズに入っていけると思う。モラルの問題もあるため、良い意味で使用していかなくてはいけない。
- ・教える側の問題もあり、高齢のため苦勞がある人もいるが、子ども達はスムーズに入れる。幼稚園頃からでもゲーム感覚で入っていければ、小学校時にはスムーズに入っていけると思う。

(2) 小学校低学年からの英語教育について

資料1について教育委員会事務局飛川所長より説明

(市長)

- ・やはり低学年から取り組みを始めた方が良い。英語にアレルギーがない時期に自然に入っていける環境を作るべきだと感じている。
- ・限られた予算内において、ICT支援員の増加についても検討してい

く。

(教育長)

- ・現在 ALT を各学校に派遣していただき、このような予算をつけていただいていることに感謝申し上げます。
- ・小学校 3 年生からは、週に 1 回授業として実施している。小学校 5、6 年生は、週に 2 時間、指導と評価が伴ってくる。また、小学校 1、2 年生については、特別な規定はないが、先生が工夫して外国語活動イコール英語に取り組んでいる。
- ・本来であれば自然に英語が学べる環境があれば良いが、現在の秩父市では外国籍の子どもも少なく、交流もあまりない現状である。
- ・近隣では、上里町や本庄市において、学校の 1 クラス 5～6 人くらい外国語を話す児童もいると聞いている。そのような環境であれば、自然に身につくかもしれないが、秩父市ではそのような環境ではない。いかに ALT の活用や先生が英語の授業を楽しく取り組んでいければと思う。ただ、低学年については、一週間の授業時間外で英語教育に取り組まなくてはいけない制約が出てくるため、なかなか難しい実態がある。
- ・グローバル化の社会に対応する人材育成は避けて通れないため、英語教育は、進めていかなくてはならない。

(浅海委員)

- ・アジア圏で英語が話せる人口が多いのは、シンガポールがあげられる。歴史や立地条件等で英語の必要性が出てくるのではないか。日本もコロナ禍以前は、インバウンドの外国人が多く入ってきた現状があった。
- ・秩父市において、英語教育に特化して、人口を増やしていく、一つの売りにするのであれば、予算をかけていっても良いのではないか。
- ・例えば、韓国であれば、TOEIC で基準点以上でないとなれば就職もできない状況となっている。やはり、インセンティブがなければ、人が動かないのではないか。
- ・使う機会が小中学校から減ってしまうと、せっかく幼稚園において、学んでも、その後インセンティブを付けていかないと、その後に繋がっていかないと感じる。動機付けやインセンティブの部分がかなり重要になってくる。

(大島委員)

- ・低学年から英語圏文化に触れることは重要である。それを行うことで中学年以降の授業にもつながる。学校の先生の負担にはなると思うが、もちろん導入したほうが良いと思う。
- ・一方で、子どもが幼い頃には、集団のルール、健康で暮らす方法など、日本のことを学んでいくことも同時進行で進めていく。愛国心を育てる教育を進めていくことが大事ではないか。
- ・また、英語圏には、子ども達が刺激的に感じる要素が薄くなってきているのではないかと感じている。そのことも、英語を知りたいということにブレーキがかかっている一因にもなっているのではないか。
- ・インバウンド時には、商店街などで、英語カリキュラムを組んでもらったことがある。コロナ禍で価値観が変わってしまったが、世界的に

は英語が一番話されているため、小学校からの学びの機会を増やしていくことには賛成である。

(山中委員)

- ・学校の授業の一環として、英語教育を考えているのであれば、それはどうなのかと思う。今の子ども達は、授業で習うべきことが低年齢化や増えているため、小さい頃からの英語教育は有意義なことであると思っはいるが、低学年から授業の一環で覚えるというよりは、ALTの先生と一緒に楽しむ感覚を身につけていくことが良いのではないか。
- ・もし、ALT 以外に授業において、他の授業への影響や英語に対して英語の興味の薄い子ども達が英語が原因で不登校などになってしまわないよう、影響を受けないように授業を進めていくのが良いのではないか。
- ・英語教育はもちろん大事であるが、小さい頃は、国語の読み書きが必要だと思う。学校教育の中で、これをどのように位置づけていくのか。現在 ALT の先生と楽しくやっているのであれば、現状がちょうど良いと思う。

(松本委員)

- ・ある本によると、0歳から10歳までの間は、耳から覚えるの非常に良い時期であるとして書かれてあった。
- ・小学校の低学年からの授業教育が必要だと思うが、授業日数が決まっている中で、それを勝手に変えることはできない。現在は、音楽や図工のカリキュラムを削って、総合的な学習の授業が増えてきた。
- ・英語を学ぶことは、コミュニケーション能力が高まることの一つである。これによって、視野が広がり、自分に必要なことを育てていくことが必要である。
- ・授業数の兼ね合いでうまく使っていけば、低学年からの授業時間も確保できるかもしれないと思っている。小さい頃から様々な言語を聴いたほうが子どものためにはなる。
- ・また、小学校高学年のテストでは、ヒアリングメインのテストになっていると伺っている。これからも授業は進化していく。
- ・意味は分からなくても、耳を慣れさせることで抵抗がなくなっていくため、学校現場でいろいろな時間を使っていくのが良い。
- ・英語教育がいずれ花開けば良いと思う。

(市長)

- ・幼稚園から耳から入れることが大事だと感じている。教育ではない。
- ・音楽や会話を流すことによって、意味が分からなくてもだんだん慣れ親しんでいく環境を作っていくことが大事だと思う。
- ・幼稚園や保育園児において、例えばお昼寝の時間で英語を流す。
- ・今後のグローバル社会の中で、自分が英語が出来ないと気遅れしてしまうのではないか。そのためには、幼児教育の中から英語に慣れ親ませる環境を作っていく、自然に英語が入っていく環境づくりが大事である。いろいろな環境を子ども達に整えていくことが必要である。
- ・ゆとり教育の弊害も出てきているため、日本の将来についても憂いてしまう。愛国心を持って国際社会で活躍してほしい。

・次の子ども達にどのような良い環境を残していくのが大事である。
教育は人づくり、素晴らしい仕事だと思っている。国際社会にしっかり
対応できる子ども達になってほしい。

○閉会

以上